前世最低の魔王、今世愛した女。

嘘つき魔神

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主となり、力を手にいれ、彼はインフィニット・ストラトスの世界を赴く。そして、よくあるアンチ系オリ主となった……そして、いつの日か一夏に破れた……それに狂い、最低最悪の魔王になり、世界を壊そうとし、一夏と戦う。

戦い終わり、地に立つは英雄だろう。だが、力を僅かでも理解した魔王の魂は、果たして滅びたのだろうか？これは、そんなお話……

目次

第０話：死の果てで ―― 1
第１話：始まる今世 ―― 4
第２話：嫌な隣人 ―― 7

第0話：死の果てで

「……負ける……とはな……」
「……そうか……」
「あぁ……強くなったな……」
　黒い、黒い、人の闇を詰めたような黒が包む空間。そこで、2人の男が話していた。片方は死にかけ、もう片方も肩や足から出血している。もう片方の、白い鎧を纏った男の腕を枕に、金のベルトを腰に巻いた男が話す。
「……いつからだったか……私は……いや、俺は酷く孤独を感じた……」
「……アイツが死んだから、か……」
「アイツは……俺が殺したのだろうな……俺の愛は、一方的過ぎたらしい……」
　そう言い、ベルトの男はゆっくり息を吐く。それを、鎧の男は静かに見つめていた。
「……俺はもうじき死ぬ……」
「……っ……」
「……何故、そんな顔をする……？俺はアイツも、アイツらも殺した……」
「……どうやっても、こうなったのかなって……」

「お前が英雄で、俺が魔王である限り……なぁ……」
「何だ……？」
「すまなかった……今さら謝っても遅いか……俺は、お前と戦(殺しあって)って、お前が……少し、分かった……気がする……」
「……そうか……」
「……もし……また会えたなら……お前……は……友であって……くれるか……？」
「……あぁ……」
「そうか、なら……嬉しいよ……俺のようには、なるな……力を……振るい方を……間違えるなよ……英雄……」
「あぁ、分かった……さようなら、魔王(鋼牙)……」
「ならいい……さらばだ……英雄(一夏)……」
　そのまま、ベルトの男は目を閉じた。その死に顔は、酷く安らかで、なのに、死んでいると確信するものだった。鎧の男……一夏は無線機を取りだし、通信する。
「……千冬姉……」
『……一夏か……？』
「あぁ……終わった……鋼牙は、殺った……ミッション、コンプリートだ……」
『……そうか、お疲れさまだ……』

「……みんなは……報われたかな……？」

『……どうだろうな、迎えは寄越す。オーバー』

その声を最後に、姉……千冬の声は聞こえなくなる。そして、一夏は、ベルトの男……鋼牙に目をやる。

「……お前も……恋に狂ったのかもな……せめて、来世に幸があることを……」

そう言い、一夏は目を閉じ、黙祷する。その脳裏に、かつての仲間たちを想いながら……

「……さようなら……俺は、間違えない……少なくとも、この力は、な……」

そう告げ、一夏は迎えのヘリに乗る。一夏はどこへ行くのだろうか？政府から最悪の魔王を討った英雄に仕立てあげられるのか、それともその力を恐れられ、酷い目にあうのか？だが、確かなことは1つ。

一夏の答えを聞いた鋼牙の頬がわずかに緩んだということだ。

第1話：始まる今世

「うぅ……うあぁ……んぅ……？」

……ここは……？いや、いい……一夏と戦って、久しぶりに生を実感できた……それだけでも満足だ……

「うー……」

毛布、だろうか？暖かい……え？

（な、何で暖かいんだ……？いや、まず毛布があることがおかしい……）

……どうやら、私は起きて、この訳の分からない白昼夢から目覚めないといけないらしい、夢の中で起きるというのも変な話だが……まず、意を決して起きる。

（……普通の部屋か、少々物が少ないくらいだな……）

ここは部屋らしい。物が少ない。パッと見だからよく分からないが……次にベッドから降りて本格的に探索しよう。そう思い立ち、ベッドから降りようとすると、少し滞空した。普段からベッドで寝ていたから分かる。いつもの私ならベッドから降りようとすればすぐ足がつく。

（……身長が縮んでいる……？あり得ない……それが本当なら、若返っていることにな

るが……）

……こうなればしょうがない。鏡を見る。この手に限る。

「……はぁ……」

ついため息を吐いてしまう。一夏と戦っていたときにはなかったが……あの時以来すっかり癖になったらしい……

私の愛した女。彼女がいなくなって以来、私は腐った。元々復讐に狂っていた、そこにもっと燃料が加わったら、もっと燃え上がるのは必然だった……故に、燃え尽きるのは早かった。一夏の身内を襲い、殺した。一夏は俺に襲いかかり、俺も反撃し、俺たちはもう引き返せないところに来た。俺は八つ当たりぎみに魔王となった。一夏は理性的だった、専用機持ちの義務を果たそうとした、アイツは英雄になった。そんな俺たちが殺し合うのは当然だった。

（……ついに来たか……さぁ、鏡や鏡や鏡さん……私の……俺の姿を写し出せ……！）

そうして、俺は鏡を見た……そこにいたのは……

（……冗談だろう……？何で、何でお前に……!?）

そこに写っていたのは……ピンクの髪に、青の瞳、その顔立ちは俺の知るものより幼い、だがそれでも分かる……

（……不知火……）

俺がＩＳ世界にまで連れてきた、とても、とても、愛しい少女だった……

「……何、で……」

訳が分からない、一夏と戦って、死んで、挙げ句の果てに不知火になっている？頭が溶けそうだ……

「……家族はいないのか……？」

いたらいたでどうごまかそうか……それでも頼れる人がいるなら心強いのだが……

「……はぁ……」

誰が言ったか、「ため息を吐くと幸せが逃げる」だったか……そう言えば、さっきから声が聞き覚えあると思ったら……そういうことか……

「あのＩＳは……やはりない……だが……それでもいい……」

もうあの力はこりごりだ……

『……私は……あなたが嫌いです……その力があなたを狂わせている……！』

「……っ……」

過去の記憶が、過去の言葉が、俺に突き刺さる。

「……不知火になって……生き返って……それで私にどうしろって……？」

あぁ、ため息をはいてもどうにもならない、分かっているのに吐かずにはいられない……こんなときに限って窓から見える空は腹立たしい青色だった。

第2話：嫌な隣人

あれから少し経った。今日も今日とて腹立たしいぐらい暑い……それに、もう1つ嫌なことが出来た。お隣さんと言うやつが出来る、だから、ついさっきスイカを買ってきた……夏にはスイカは合う……

（……はぁ……そう言えば、そろそろ学校も始まる……私口調を定着させねば……）

どうやら、今の私は小学生らしい、それも1年……どうやって学力を誤魔化せと？

（それもそうだが……お隣が誰かも気になる……）

なんというか、嫌な予感がする……具体的に言えば殺し合った奴の子供時代に会いそうな……

『ピンポーン……すみません』

「……え、あぁ、はい」

どうやらもう来たらしい……どうしよう、絶対に出たくないぞ……

「……すぅー……はぁー……よし、はい、どう……ぞ……」

ああ、会いたくなかった、開けなければよかった。何で、よりによって……

織斑千冬（おりむらちふゆ）が目の前にいるんだ……？え、そういえば、一夏……は……

そこまで考えて頭を抱える。まじか、そういえば、しばらくは現状整理のために外には出なかった……冗談じゃない、篠ノ之束もいるかもしれないのか？もし、目を付けられたら……

「……あの？」

「……何でもありません……えっと、西原不知火です……どうも……」

「織斑千冬です、あぁ、これ、粗品ですが……」

「あぁ、すいません……」

こうして、織斑千冬とのファーストコンタクトは終わったのだ……一夏に会わなかっただけまだいいかもしれない……

「織斑一夏です、よろしく！」

「……ｏｈ　ｎｏ……（小声）」

フラグ立てるんじゃなかった……子供の時の一夏……ちっさい……殺し合い、本当にしたっけ……かわいい……いやそれより何で俺は織斑家に誘拐されてるんだ？

「……お、織斑さん、どういうことですか……お、ゴホン……私はただの隣人で」

「いえ、せっかくですし……ね」

訳が分からない。ついさっき織斑千冬が家に来たかと思えば「家でご飯を食べないか？（要約）」と言われ、俺はホイホイと着いていってしまった……その結果がこれだよ……

「ん？出来たか……」

……香辛料のいい匂いがする。カレー……そういえば、最近食事はコンビニ弁当だったっけ……手料理、か……

『――、ご飯食べるよ！』

「……っぅ……」

……何で、今思い出すんだよ……懐かしい……またあの肉じゃがが食いたい……

その日のカレーはとても塩辛かった……気がする。